

何のために働くのか？

koberyo1

宮本武蔵が主人公の映画でしたが、これがわたしの脳裡につよく焼き付いて離れないのです。それは次のようなシーンでした。沢庵和尚が雨の降るなか、杉の大木に縛り付けられた武蔵にむかって「おのれを知れ！」と激しく言い放つシーンです。この映画をみたのは、たしか小学生の六年生のころでした。すでに七十年以上もの歳月が経ったにもかかわらず、わたしの脳裏で今もなお輝きつづけているのです。

おのれを知れ、と。

こんにちなお、光輝いてやまぬこのフレーズ、――おのれを知れ、とは果たしていかなることでしょうか？ わたしは折にふれ、「おのれのことをほんとうに知っているのだろうか」などと、この文言を反芻し、これまで延々と考えつづけてきました。

ともあれ、「働く」という行為のなかに、沢庵和尚が武蔵にむかって一喝した問答の答えがあるような気がします。それはこれまで八十年もの人生を生きてきたわたしの結論めいた思いでもあるのです。

時代は違いますが、吉田松陰や坂本龍馬、それに幕末の志士、または太平洋戦争の当時、死を覚悟して特攻していった若者たちのことを思うと胸が熱くなります。

彼らはまさに死を賭して「働いた」のです。死を覚悟して事に望んだとすれば、その働きとは、まさに天命といえるのではないのでしょうか？

おのれを知る、こととは、すなわちかれらにとって天命を知ることでした。だとすれば、彼らはなんと幸せな若者だったことでしょう。現在は平和でモノが洪水となってあふれている時代です。食べることの心配もなく、毎日、安全と安心のなかで天命を悟ることなく生きているのです。現在の若者とは、何とふしあわせなことでしょう。

学校でも家庭でも「おのれを知る」機会がありません。自分自身を知る機縁もなく、軸がぶれている状態で社会にでて仕事をしたところで自分の力を発揮できるわけがありません。「おのれを知る」ための早道は、兎も角、「働くこと」に尽きると思いのです。

人は誰しも自分の生命の維持はもとより、親のため家族のため、ある程度の年齢になると職に就き、人生の大半を働かなければなりません。「働くことが人間性を深め、人格を高めもする。働くことは人間を磨くこと、魂を磨くことだ」と書いたのは、京セラの元社長の稲盛和夫氏でした。

わたしが誕生したのは、西暦でいうと1927年です。当時は「働く」とは、「東の空にお天道様がのぼったら鍬をかついで野良（田畠）に行け。文句を言うな」ということでした。十歳頃、この言葉を父から聞いたのを今でも頭のなかにあります。すなわち「

なにごとくも文句を言うな」でした。今では通用しなくなりましたが。

働くというのは、産業が確立されていない発展途上の社会では、雨や雪が激しく降らないかぎり、お天道様が西の空に沈み、手や足が暗くなって見えなくなるまで動きつづけるのが常でした。

欧米では労働者を保護する観点から八時間労働が妥当であるとされるようになり、これが先進国の条件となりました。日本でも現在では同様の労働基本法が実施されています。

しかし、わたしは働く人の考え方にあると思うのです。アメリカ的考え方では、すべて労力は賃金になるという思考法です。この思考法は一見、ただしいように思いますが、はたしてそうでしょうか？

わたしたちの生きている社会の仕組みは人間がつくったものです。仕事をする相手も人間です。人間である限り、労働を賃金によって換算するという合理的思考では解き得ない何かが残るように思うのです。

わたしが新入社員時代の教育は、先輩からの厳格な指導のもと仕事をしながらなされました。仕事の内容は午前は会計、午後は営業、夕方五時から総務の仕事をしました。それらの仕事のあいまに見積書を書いたり、封筒の宛名書きまでやり、郵便局に投函するのもわたしの仕事でした。これを三年間、やりました。仕事はそれだけではありません。雑用もいろいろ言いつけられました。やれタバコを買ってこい、新聞を綴じろ、とか色々私用も命じられました。しかし、石の上にも三年、じっと辛抱してこの仕事をクリヤーしたのです。

艱難辛苦が与えられることによって人間的成長ができるのです。好きとか嫌いとかで判断しては自分の望む仕事に巡りあえないのではないのでしょうか？もし自分の一生の仕事を持ちたいと切望するならば、与えられた仕事を素直に受けとめることです。そして熱意と強靱な意志をもってそれを続けて行けば、それこそ天命、天職となるのです。